

Environmental elements sung in school songs
Relation between regional environments and
primary schools of Fukui prefecture

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 月原, 敏博, 大須賀, 千種, TSUKIHARA, Toshihiro, OSUGA, Chigusa メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/3059

校歌で何を歌うか？

－福井県内小学校の校歌と地域環境－

Environmental elements sung in school songs

Relation between regional environments and primary schools of Fukui prefecture

月原 敏博(*¹) 大須賀 千種(*²)
TSUKIHARA Toshihiro · OSUGA Chigusa

(2010年9月30日 受付)

キーワード：小学校校歌，景観の構図，環境要素，福井県，地域科学

Keywords：Primary school songs, Structure of landscape, Environmental element, Fukui Prefecture, Regional Study

1. 地域環境と校歌

地域と学校との関係を考える時，初等教育を受け持ち，中学・高校より一般に校区が小さい小学校が持っている意味と役割は大きい。小学校には，小学校だからこそそれに付随する地域的機能があるため，その廃校や統合は地域にとって一大事であり，廃校が廃村化を加速するようなことさえありうる。

ところで，小学校の校歌には次世代を担う子どもたちのアイデンティティー形成に資する効果があるとされている¹⁾。校歌にはしばしば地域環境が歌われるが，地域環境の保全や地域コミュニティの存続が求められている今日においては，校歌とそれが果たす役割にはもっと注意が払われてもよいだろう。

校歌に関する研究は様々な分野でなされてきており，教育学や音楽学のほか，建築学などでも校歌を対象とした研究がある²⁾。地理学では，朝倉隆太郎による全国の中学校校歌の研究³⁾に代表されるように，山々など校歌に歌われる自然要素の地理的分布と学校との位置関係が検討・

¹宮島幸子 2008 校歌の文化的役割.『京都文教短期大学研究紀要』47：90-96.

*¹ 福井大学教育地域科学部地域政策講座 (University of Fukui)

*² 福井大学教育地域科学部卒業生 (Graduate of University of Fukui)

議論されてきた。ただしそこに従来の地理学での校歌研究の単調さと偏りがあり、地域環境だけでなく歌い手である児童自身という主体も含めた、校歌に描かれる景観全体の十分な理解には至っていなかったと思われる。

校歌は決して歌詞だけで捉えきれるものではない。曲の問題はもちろんあるし、また、例えば福井県内の小学校校歌では同一の作詞者や作曲者の手になる校歌が少なからずあるから、作詞者や作曲者に注目した作家論的なアプローチからの研究などもありえよう。本研究では、そうした校歌のもつ多面性と多彩な研究可能性をも意識しつつ、地理学からの校歌研究として、地域環境と校歌との関係を考え直してみたい。歌詞の内容の整理・分析が主となるが、次の諸点に留意して進めることとする。

- ①地域と学校との関係を基本的な関心におくことから、廃校・新設校などの問題をも含め、特に戦後の小学校史の大きな流れの地理的展開をまずおさえる。
- ②歌詞の分析において、地理的環境を指す語句、つまり環境的要素を拾ってその分布を考えるだけでなく、校歌を歌う児童自身に言及する語句、つまり主体的要素にも注意を払い、歌詞に現れる諸要素が描き出す地域や景観全体の構図の理解を目指す。
- ③環境的要素であれ主体的要素であれ、表現の仕方は多様である。固有名による全く具体的な表現もあれば抽象的な表現や比喩的な表現もあることなどに注意する。
- ④校歌の制定年に注意して、歌の内容にどのような歴史的な変化がうかがえるのかについても注意する。

なお、本研究は、著者らのうち月原の指導の下に大須賀が取り組んだ卒業研究をベースにしつつ、資料を追加収集して卒業研究の一部を全面的に書き直したものである⁴⁾。

² 矢部恒彦・北原理雄・徳山郁芳 1995 小学校校歌に謳われた全国の地域景観イメージに関する研究。『日本建築学会計画系論文集』472: 111-122.

千葉忠弘 1996 校歌から見た沿岸町村の地域景観イメージに関する研究。『日本建築学会北海道支部研究報告集』69: 521-524.

³ 朝倉隆太郎 1999 『山と校歌：中学校校歌にうたわれている山地』, 二宮書店. 392p.

佐々木力 2007 秋田県雄物川本流域における小中高等学校歌詞に表現されている環境要素。『秋大地理』54: 11-14.

⁴ 大須賀千種 2010 『地域と学校 -福井県内小学校の戦後60年-』(福井大学教育地域科学部 平成21年度卒業研究)

⁵ 『福井県教育百年史第四巻史料編 (二)』

『福井県教育委員会五十年史』, 『同四十年史』, 『同三十年史』, 『同二十年史』, 『同十年史』

『学校基本調査報告書』昭和23年度～平成20年度

『福井県教育関係職員録1951年度』, 『同1960年度』, 『同1970年度』, 『同1980年度』, 『同1990年度』, 『同2000年度』, 『同2008年度』

2. 福井県内小学校の戦後60年

まずはじめに県の教育史に関わる基本的な諸文献⁵⁾をもとに、福井県内小学校の戦後の流れを概観しておく。

教育基本法などのいわゆる教育三法が昭和22～23年に制定されたことに象徴される戦後の教育が始まってから、すでに60年を超えた。福井県内の小学校数は、平成20年現在、本校が211校、分校が2校のみ（うち1校は休校）であるが、図1に示すように、戦後間もない昭和23～25年頃には、本校・分校あわせて小学校

数は370校（昭23：370，昭24：368，昭25：369）にも達していた。本校は昭和23年の250校、分校は昭和25年の130校がピークであり、戦後間もない頃には実に多くの分校があったのである。

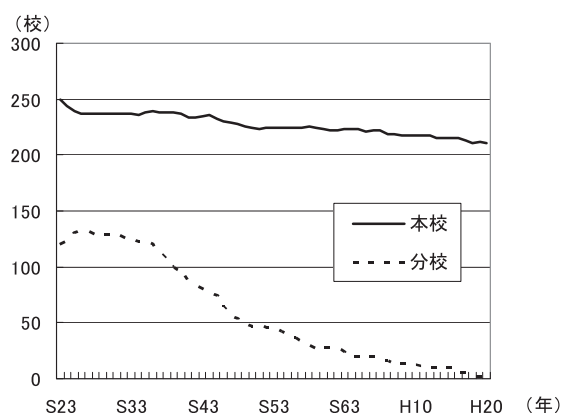


図1 福井県内小学校数の変化

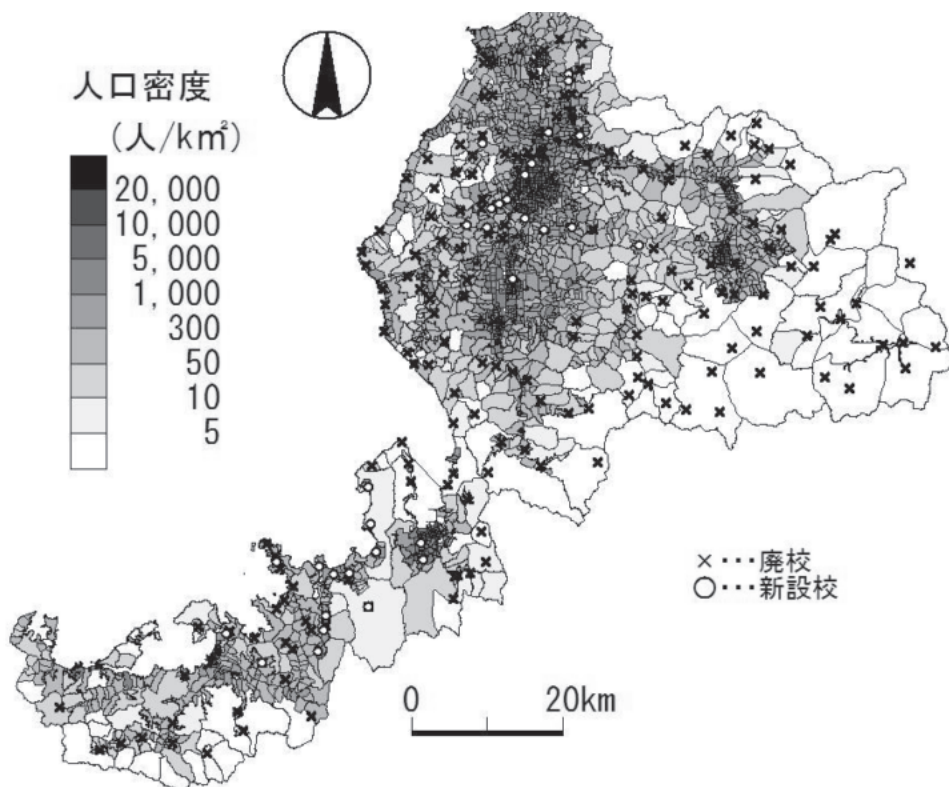


図2 戦後の小学校の廃校・新設校の分布と平成17年人口密度

戦後約60年の変化を要約すれば、戦後初期には優に百を超えていた分校は今ではほぼすべてが廃校となって本校に吸収された。また、グラフには総数のみ示しているが本校においても70校近くが統廃合の対象となる一方で新設された本校も30校余りあり、結果的には本校においても差し引き40校ほど数を減らしたのである。

戦後初期を起点としてその後の廃校・新設校の分布を図2に示した。背景に重ねたのは平成17年国勢調査による人口密度分布であり戦後の人口の増減を直接示してはいないが、廃校になった小学校は、人口密度の小さいへき地の中山間地で目立っていることがわかる。そして、上述のことから図中の廃校を示す印の大部分は分校が占めていることが理解されよう。

一方、新設校は、福井市など平野部の都市周辺で宅地化が進んだ地域にその大部分が生じたのであるが、そのことはこの図2からもうかがうことができる。近年では、平成19年に春江小学校から分校・新設された春江東小学校などがその例である。ただし、三方町の岬小学校の例の

ように、一部、へき地でも複数の分校が統合されて新しく本校として設置された新設校もあった。

学校数が減る背景の一つには児童数の減少がある。県内小学校の児童数は図3のように変化しており、平成20年には約4.8万人で戦後ピークの昭和33年（約11.4万人）と比べると半分以下（42%）に減った。また、教員数、及びそれと児童数から算出できる教員一人当たりの児童数は図4に示したが、教員数が横ばいなし微増傾向にあるのに対して児童数が減少してきたことがわかる。県全体としての教員一人当たりの児童数は平成20年には14.9人であり、昭和33年のピーク時（34.7人）と比べると57%減となった。

図5は児童数と教員数とを学校単位で示したものであり、教員一人当たりの児童数はこのグラフの回帰線の傾きに相当するが、たしかにそれが減少して傾きが緩くなり、少人数教育は各小学校において漸進してきたことが理解される。また同時に、この図からは統廃合にもよって学校規

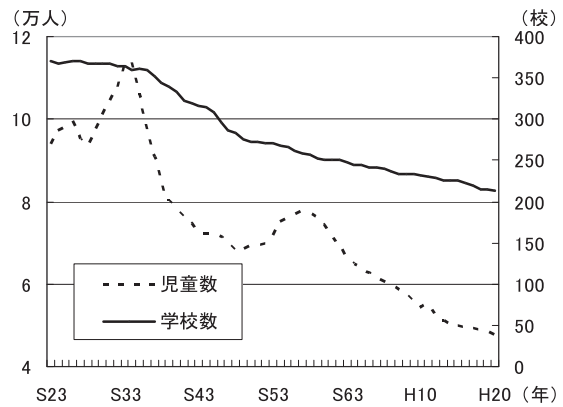


図3 児童数と小学校数の変化

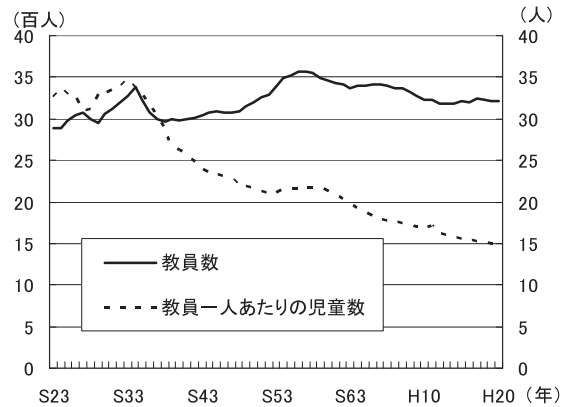


図4 教員数と教員一人当たりの児童数の変化

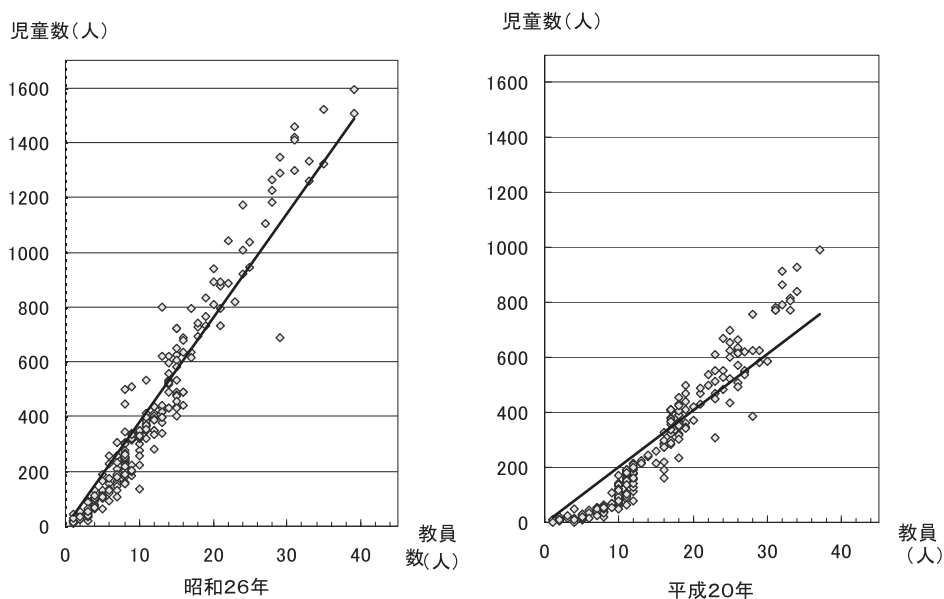


図5 学校単位でみた児童数と教員数の変化

模の「適正化」が進んできたことも読み取れる。つまり、教員数が10人に満たないような小規模校が激減し、それと同時に児童数が1,000人を超えるような大規模校もなくなってきている。

近年では、少子化が進むなか、もはや学校数を減らす際に統合対象となる分校はなくなったことと関わって、複数の本校を統合して一つにまとめ、その校区の拡大をスクールバス通学の拡大とセットにしてゆく動きがみられる。平成13年に芦見・上宇坂・上味見・下味見の4校を統合し、もとの上宇坂小学校の位置に新設された美山啓明小学校の例や、現在勝山市で進行中の、小学校9校を3校に再編する動きなどはその例といえる。

3. 校歌調査での基本事項 —意外に難しい調査—

福井県内小学校の校歌調べは、平成21年から22年にかけて、学校ホームページの確認、記念誌など学校誌の確認、手紙の郵送による各小学校への直接の問い合わせ、の主に3つの方法で行った。

校歌調査は簡単なようで難しい。県の関係機関などで組織的にまとめられた校歌集があれば助かるのだが、調べた範囲では福井県ではそのような資料は存在しない。今では多くの小学校がインターネット上にホームページを開いているが、ホームページはあっても校歌はそこに掲載されない例も多く、特に廃校となった学校では、記念誌等が残ってなければ昔の校歌は把握するのが容易ではない。

歌詞を整理・分析する前提として、校歌データの基本事項には、1) 学校名、2) 歌詞、3)

制定年，4）作詞者・作曲者，をあげることができる。さらに何より歌詞に出てくる語句の意味を正確に知る必要があり，これはその学校の卒業生なり先生方に確かめないと正確には分からないことがある。しかし，当該校へ問い合わせても十分な情報が得られなかったこともあった。また，基本項目のなかでも学校によっては3）や4）には抜けが生じることが珍しくない。ほかに，校歌が歌われた期間，校歌制定時の経緯，歌詞に変更があった校歌ではその変更箇所や変更年，統廃合の歴史がある学校ではその歴史と校歌との対応を細かく把握する必要があるが，得られるデータにはどうしても精粗が出てくる。

上述の方法により平成21年秋以降，平成22年9月現在までに収集できた福井県内の小学校校歌は，総計で165校，172校歌であった（県内小学校の7割半程度）。まだ未収集の小学校も残っているのでデータベースは依然として未完成であるが，研究途上でおおよそ見えてきたことを本論文で記しておきたい。

4. 校歌に歌われる環境的要素

得られた多数の校歌を並べてみると，なかには変わった個性的で例外的な歌詞をもつ校歌もある。しかし，校歌の歌詞に現れる諸要素には，やはり一定の傾向があり，身近な山川などの環境と，児童たち自身という主体の双方の要素を歌うことで，児童・学校を中心とする地域の景観が描かれていることが一般的である。そこで，まず次のように環境的要素を3つに分けて，歌詞に現れる地域環境を示す語句について整理を行った。

<環境的要素>

- －自然要素　．．．．．例．「九頭竜川」
- －歴史・文化要素　．．．．．例．「春日の森」，「振媛」
- －産業要素　．．．．．例．「大漁旗」

自然要素では，各学校から近距離にある山や川の名前が現れることが多く，校歌に明示された山と川在具体例については，その集計結果は図6のとおりであった。山で言うと，収集しえた165

自然要素の具体例	
<ul style="list-style-type: none"> • 白山 (16校), 文殊山・日野山 (7校), 蔵王山 (吉野が岳)・野坂山 (4校), 足羽山・丈鏡山・青葉山 (3校), 飯降山・亀山・経ヶ岳・剣ヶ岳・高須山・久須夜ヶ岳 (2校), 刈安山・木ノ芽峠・銀吉峰・国見岳・越知山・衣掛山・三十三間山・三内の山・白檜山・頭巾山・大日岳・高尾山・高雄山・天神山・天満山・西方が岳・後瀬山・白根岳・鉢伏山・三坂の山・村岡山・観ヶ岳・権山・八ヶ峰・鷹ヶ岳・朝倉山・多田ヶ岳・飯盛山・鬼ヶ岳・筆山 (1校) 	
<ul style="list-style-type: none"> • 九頭竜川 (28校), 日野川 (12校), 足羽川 (10校), 朝水川・志津川・竹田川・南川 (3校), 茜川・荒川・木の芽川・佐分利川・天王川・三方五湖・吉野瀬 (2校), 朝六つ川・芦見川・一栗川・鶴の瀬・会下の川・音無川・黒河・関屋川・大納川・時勢川・七瀬川・羽生川・北湯湖・未更毛川・女神川・服間川・龍川・北川 (1校) 	

図6 校歌で歌われる自然要素（山川）の具体例

⁶校歌に現れる地名の理解には次の地名辞典を参照した。

『角川日本地名大辞典 18 福井県』，角川書店。

校の校歌で歌われる福井県の山は、その最高点が現在の福井県域には属さない白山を含めて43座ある。泰澄ゆかりの白山や文殊山、日野山などがよく歌われていた。川では、九頭竜川、日野川、足羽川などが多く歌われていた⁶⁾。

ただし、山であれ川であれ、学校との位置関係を確認すると、学校から近距離に位置する身近な山川が歌われるのがほとんどであることが確認できた。このことは、図7の主な山々を歌う小学校と、図8の主な河川等を歌う小学校の場合を例に示すとおりであり、当該の山川からの距離が5キロから10キロメートル程度の圏内に収まるものが、山の場合であれ川の場合であれほとんどすべてを占める。海についても同様で、図8に示すように、日本海を歌う小学校の分布は、日本海の沿岸から近い位置にある小学校にそれが限られており、山川であれ海であれ、校区あるいは校区にとどまらなくてもせいぜい10から15キロメートル圏内の山・川・海が歌われるという一般的傾向を確認できる。

しかし、そうした近接性においては、白山の場合には、他の山々や川とは異なる特徴を持つことも判明した。白山を歌う小学校は図7に示すとおりで他の山々とは異なる分布特性を持つ。すなわち、当の白山に近い勝山市域等の小学校で歌われるよりも、50~60キロも離れた、福井市街から三国にかけての坂井平野北部の小学校で歌われる例が多く見出されたのである。白山の場合

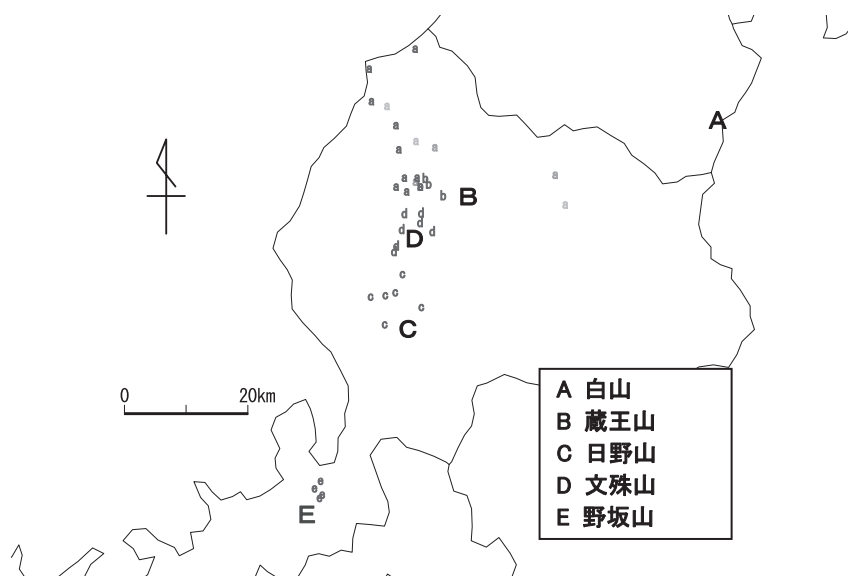


図7 校歌に歌われる主な山々と学校との位置関係

注) 小文字が該当する学校の位置を示す。

薄い文字は抽象的な表現をあらわす。

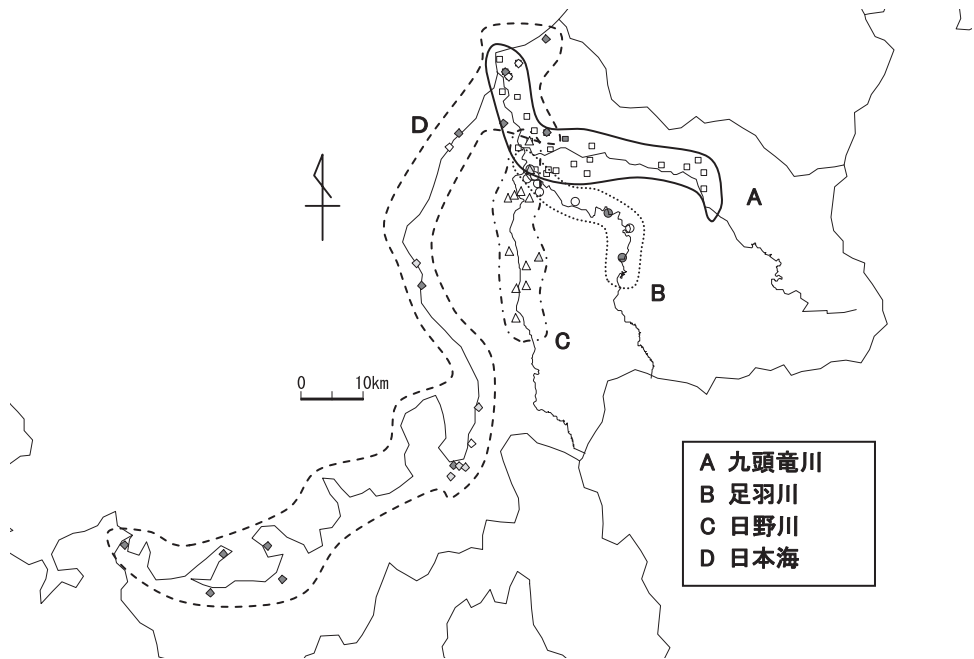


図8 校歌に歌われる主な河川等と学校との位置関係

注) 薄く塗った記号は抽象的な表現をあらわす。

は、その有名度において県内の他の山とは段違いであるから歌われる範囲が自然と広がるということもありえようが、しかしこの場合は、白山が歌詞に現れるか否かに影響しているのは可視性であろうかと思われる。白山により近い勝山などより、坂井平野北部からは特に冬季の晴天時には雪化粧の秀麗な白山を遠くに望むことができることが影響しているであろう。分布を微細に確かめると、丹生山地以西の日本海側や、金津など、手前に山があるために白山が見えない地域では、その、手前にあるより身近な山々が歌われているのである。

ところで、図7～8に記しておいたように、歌詞に現れる自然要素の表現の具体性には、様々なレベルのものがある。白山、九頭竜川、日本海といった、動かしようのない具体名（地名）でもって自然要素が表現される場合もあれば、九頭竜川や日野川、足羽川を「大川」と表現するような例もある。日本海の場合、「日本海」とか「気比の海」といったかたちではっきりと歌詞に現れる例もあるが、「海」、「潮」、「潮風」のような表現で海、ひいては日本海のことをいう例も少なくない。上で行ったいくつかの整理では、表現がいくらか抽象的であっても、具体の山川等を指すことが歌詞から読み取れるものもカウントしたわけである。

校歌に歌われる自然要素は、山・川・海だけではなくもちろんない。まず空や大地、風はよく現れるが、空や風には各地域に固有のそれはないから、山川のような具体の表現は採られようがない。

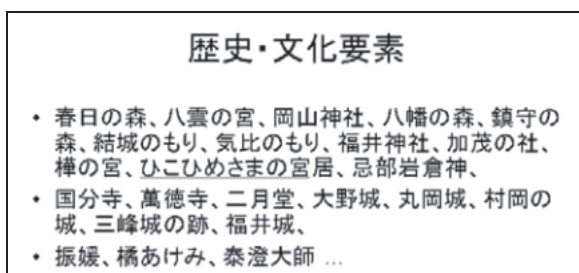


図9 歴史・文化要素で歌われている例

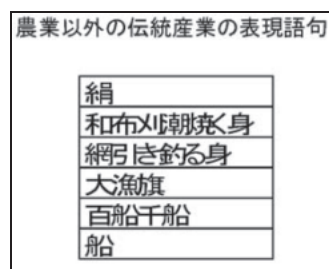


図10 農業以外の伝統産業

また、鳥、魚などの動物、草花や樹々といった植物もよく現れるが、それらも一般名詞で抽象的に現れることが少なくない。地域に固有ないしは地域の名物であるような生き物や、学校で記念植樹された特定の樹といった具体的なものを指して、より具体的に表現されてる場合でも、動植物は種名などで表現されるにとどまる。このように、校歌に歌われる自然要素には、その表現には具体性（抽象度）において様々なレベルがあるということと、表現される要素自体の性格に応じて、表現の仕方には一定の限界があることは注意されておいてよいことだと思われる。そして、地域固有の自然を明確に表現しうるのは、歴史的に成立した自然地名（山名、河川名等）であると指摘できる。

次に、歴史・文化要素と産業要素についても簡単に触れておく。歴史・文化要素では、「越」のような、歴史性をもっている旧国名や郡名、郷名に由来する地域名を除くと、度々現れる固有名はなく、その例は図9のとおりであった。この範疇においては、抽象的な一般名詞としては「歴史」や「文化」といった語は多々見られるのであるが、具体的にそれを明示するときには各地域の寺社と旧城の名が多く取り上げられ、郷土史に関わる人名（および神名）もいくらか見られることがわかる。

続いて、産業要素では、農業、とくに稲穂の実る田野を指す表現は非常に多くの校歌に現れるのであるが、それを分類・整理する必要は特に感じられず、また適当な方法も考えられなかったためここでは示さない。農業以外の産業については、図10のとおり伝統産業に関わるものはいくらか見出されたがその大部分は漁業に関わる表現であり、海岸部の小学校に現れた。これら第一次産業に比べると、産業といっても第二次・第三次産業に関わる表現はほとんどまったく見出すことができず、唯一図10に示した絹が、伝統産業と考えられるからであろう、現れたのみであった。このことは、近代に発達著しい第二次・第三次産業は、校歌で歌う内容としては選ばれていないことを意味するといえよう。なお、第一次産業の場合、産業要素といっても半ば自然要素に近い性質を帯びていることは、注意しておいてよいだろう。

5. 主体的要素とその歴史的变化

主体的要素には、次のようなものがあると観察された。

<主体的要素>

- －児童を表す1人称的表現　・・例、「われら」
- －児童を表す比喩表現　・・・・例、「若草」
- －学校・学舎そのもの　・・・・例、「□□小」

これらのうち、児童自身を表す1人称的表現は大部分の校歌に現れる。「われら」、「わが（母校など）」、「みんな」、「わたしらぼくら」、「ぼくたちわたしたち」、「己」、「□□の子」などの表現を数えたが、これらは各校歌の制定年と関わる歴史的变化が著しいと観察されたため、戦前（終戦以前）に制定されたもの（とそうみなすことができるものをあわせた49校歌）と、戦後に制定されたもの（104校歌）に分けて現れ方を整理すると、図11のような結果となった。

戦前に制定されたであろう校歌 49校歌		戦後の制定が明白な校歌 104校歌
22	主体的要素なし	7
12	わが	32
13	われら	55
0	みんな	17
0	ぼくたちわたしたち	4
5	〇〇の子	9
2	己	0
2	われ	3
0	わたしらぼくら	5

図11 歌われる主体的要素の変遷

まず、戦前制定の校歌にはこの1人称的表現がない校歌も少なくなく、その半数以上にものほった。その一方で、戦後制定の校歌ではその9割以上（93%）にこれが現れていた。出現頻度とともに「われら」に次いで「わが」が多かったが、「みんな」、「わたしらぼくら」、「ぼくたちわたしたち」は戦後制定の校歌にのみ現れ、「己」は戦前制定のものにのみ現れていた。自己に言及する頻度とその表現の仕方に、明らかに時代変化がみられ、戦後制定の校歌の方が、やわらかい表現が採られる傾向を把握できる。

この歴史的变化に気付かされることで、戦前・戦後を比較する観点から改めて歌詞を読む必要性が理解されたが、その作業を行ってみると、環境的要素と主体的要素に分けて校歌に描かれる地域を捉えるだけでなく、さらに別の観点からも校歌を見なければならぬことも理解されることとなった。

6. 様々な表現から辿れる校歌の歴史的变化

本稿執筆までの時点では、歌詞から抽出できる様々な語句について十分に分析し終えたわけではないが、戦前と戦後の校歌を比べて違いが見出せることは、少なくない。

単純な違いが見出せるのは、まず歌詞の長さや漢字の多さである。戦前制定の校歌は漢字が多く今や難読の語もある一方、戦後制定のそれではひらがなが多く易しい語が採用される傾向が見

られる。戦前の校歌はより簡潔で短かったが、戦後の校歌は修飾語が増えたことも手伝ってより長くなっている。

先にみた環境と主体なる要素の分け方で地域を捉えるだけでは整理しづらい語句や表現も少なくないことも分かった。図12に示すように、戦前制定の校歌では国家や天皇を意識させる語句が比較的多く見られるほか、「たえる」、「忍びて」などの表現が目立ち、艱難辛苦に耐えて立身出世したり、国に奉仕する姿勢を称えるものが少なくない。また、図13に示すように、戦後制定のものにのみ現れるか、とくに戦後に多い語句としては「夢」、「理想」、「希望」、「世界」、「平和」、「科学」、「宇宙」、「自由」などを確認でき、終戦を境に、教育の場で称揚される価値観の変化と、小学校を取り囲む社会の変化が、時代の空気として校歌にも如実に反映していたことを確認できる。

戦前から戦後への変化を象徴する例は、図14に示す福井市のD小学校の修正例であろう。ここでは、「大御勅語をかしこみて」を「新憲法をかがみとし」へと修正した。収集しえた校歌のなかには、この例のように戦前の古い校歌とともに戦後に採用された新しい校歌の双方を確認できた学校の例がいくつかある。ごく一部の語句の修正にとどめられたものもあるほか、まったく新たに作り直された例もある。また現在でも戦前に制定されたままの校歌を歌っているところもある。その意味では、現在歌われる校歌には、制定年の様々なものが混在している。ここでは戦前・戦後と2大別して述べたが、戦前でも明治と昭和ではいくらか異なる性格がうかがえることにも、注意しておきたい。

語句の例	制定年
み国	明治33年
御国につくさむ身	明治34年
国柱	明治37年
大御宝	明治37年
御代の光	明治42年
御代の恵	大正
此のよき國	大正3年
三つのいましめ	大正3年
心の玉	大正4年
玉なす実	大正4年
大御勅語	大正10年
国の護	昭和8年
国の富	昭和8年
たえて忍びてくずれず折れず	昭和8年
大和魂	昭和8年
和協一致	昭和8年
国のため	昭和14年

図12 戦前に制定された校歌に現れる語句

戦前に制定された あろう校歌 49校歌		戦後の制定が明白な 校歌 104校歌
12	国(國)	7
8	御	1
2	業	1
2	耐え	3
1	魂	3
6	歴史	16
0	宇宙	2
0	自由	3
2	平和	10
0	日本	6
1	文化	9
0	世界	10
0	科学	10
5	鍛え	25
10	光	40
1	理想	17
0	夢	23
3	希望	41

図13 歌われる語句の変遷

福井市D小学校

- | | |
|--|---|
| <p>一、春遊大師の昔より えにしゆかしき
大安寺 いと大らかに安らかに その名
にちなむわが校舎</p> <p>二、九頭竜川の水澄みて 徳まずたゆ
まずそそぐごと ゆたかに清くとこしえに
光望みていざ勉めん</p> <p>三、大御勅語をかしこみて 郷土に生い
立つ竹のごと 心はすぐに身は強く 伸
ばし鍛えていざ勤まん</p> | <p>一、春遊大師の昔より えにしゆかしき
大安寺 いと大らかに安らかに その名
にちなむわが校舎</p> <p>二、九頭竜川の水澄みて 徳まずたゆ
まずそそぐごと ゆたかに清くとこしえに
光望みていざ勉めん</p> <p>三、新憲法をかがみとし 郷土に生い
立つ竹のごと 心はすぐに身は強く 伸
ばし鍛えていざ勤まん</p> |
|--|---|

昭和17年制定

戦後一部改正

大御勅語



新憲法

図14 戦後への時代変化を反映する修正

7. 地域と景観の構図

児童自身を指す主体的要素と、自然、歴史・文化、産業などの環境的要素によって、児童と学校を取り囲む地域は描かれると考えることができるが、新たに視野に入った語句の群が示唆しているのは、主体と環境からなる地域を把握するだけでは校歌としては不十分な理解に留まる面があるということであろう。地域は、ただそれだけでは宙ぶらりんであるから、より大きな時間と空間の中に児童がいまいる地域を関係づけ、また将来の生きる目標や生きる手がかりとなる価値、あるいはその手段を指し示してやる作用を、これらの語句は持っているものと考えることができる。

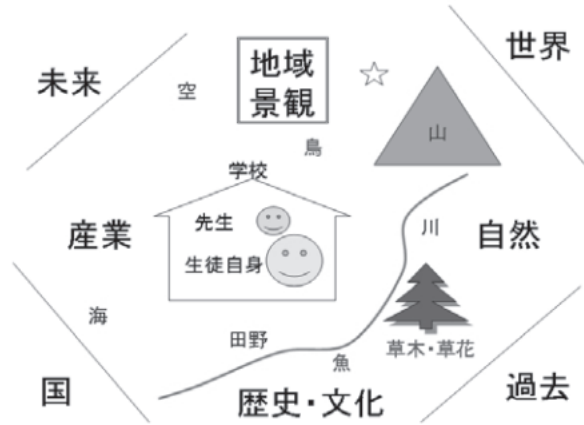


図15 校歌に歌われる諸要素

そのように改めて捉えなおすと、校歌に歌われることの多い諸要素は、図15のようなラフスケッチが可能である。校歌においては、それを歌う児童と学舎を中心に、自然要素をはじめとする地域環境が歌われる。この環境的要素には、山川や海、空のほか、鳥や魚、草花や樹々という生き物も現れ、児童自身がそれらの生き物にしばしば喩えられて生きる主体として表現される。地域には自然要素だけでなく歴史・文化要素や伝統産業の要素があり、いま児童の居る現在は歴史的に培われてきた時間軸のなかで位置づけられる。また、国や世界への言及がなされることで、児童の居る地域はより大きな空間的広がりや秩序のなかに位置づけられる。

地域という場は人間の住む場であるが、それがこうして時空間に位置づけられるとき、校歌はじめて地域の環境と社会を維持・再生産すべき担い手であることを児童に教えるといっているのではないだろうか。地域というものの、古典的な一つの理想型ではあるが、「山河に生まれ、山河に行き、山河に眠る」ことが世代を超えて続けられるとき、時代を超えて生命を育み、受け継がれる自然としての山川等と、先祖から子孫へと時代を超えて受け継がれる伝統・文化・歴史は一体的なものとなる。そこでは、固有名をもつ環境的要素は、非常に重要な意義をもっているはずである。

8. 減少し抽象化する地域環境

最後に環境的要素に戻り、地域環境に関わる近年の校歌の傾向として二つのことを指摘しておく。

一つは統合に伴う、歌われる環境の不可避的な減少である。はじめのほうで述べたように、少

子化や過疎化によって複数本校の統合が進む現状のなかでは、校歌も複数あったものが統合され校歌の数自体が減る。したがって、歌われる地域環境の要素も当然数を減らす。それは現実に進行中である。平成13年に美山啓明小学校として統合された4校がもともと歌っていた環境的要素には、「飯降の峰」, 「足羽川」, 「剣ヶ岳」, 「芦見川」, 「味見の里」, 「伊自良」, 「樺の宮」, 「銀杏峰」が数えられたが、統合後には「足羽川」と「白樺山」のみしか歌われなくなっている。

もう一つは歌われる環境的要素の抽象化である。歌われる地域環境の減少は、学校数自体の減少によるだけではなく、近年作られた新しい校歌ほど地域環境を固有名で歌わず、抽象化・曖昧化する傾向があることで加速されているのである。図16は数年前に新設された坂井市のH小学校の例であるが、この新しい校歌では、学校名以外は固有名で歌われてはおらず、地域の自然要素も、風、大地の花、煌めく星、美しい空、といった抽象的な表現でしか歌われていない。さらに、歴史・文化や産業の要素についても何ら固有名は現れない。学校名を伏せれば全国どこの小学校校歌か一切判別不能なこうした校歌の出現は、地域の消失とも言うのであろう。このような校歌の出現もまた、人口の地理的移動が激しいために、地域とそこに住む人口が作る社会との経時的な一体性が、少なからぬ地域では失われているという時代状況の反映であり、校歌は時代の鏡であることが再認識される。

しかし、ではいったい、古典的で理想型ともいえる地域像のほかに、どのような地域像が将来ありうるのであろうか。そういう新作の校歌とともに、戦前制定の少なからぬ校歌も同時代のいま並存して歌われ続けているという多様な校歌の混在状況とあわせて、地域環境と校歌、ひいては地域と学校との関係をどう展望してゆけばよいのか、検討すべき課題は多い。

H小学校・平成19年開校

夢のとなりの ぼくらの学校 やさしい未来と手をつなぎ
風に 舞え 舞え さあ 駆けだそう ふるさと
大地の花になれ

夢のとなりの わたしの学校 おおきな歴史とにんげんの
未来をたずねて さあ 羽ばたこう ふるさと
煌めく星になれ

みあげた美しい空 つながってるね 心 学びあい
響きあい 高めあい みんなみんなのH小学校
平成20年2月制定

図16 新設校の校歌の例

Abstract

School songs of primary schools in Fukui Prefecture, Japan, were collected / analyzed in order to understand relationship between regional environments and the schools. Environmental elements sung in the songs could be divided into three categories. Mountains and rivers in school's vicinity are most often sung among natural elements. Buddhist temples and Shinto shrines are so among historico-cultural elements. Farming landscape is so among economic elements, whereas industrial or commercial landscape are hardly sung.

It was observed that expressions of subjective elements, or pupils themselves and the school itself, have shifted historically. Similar historical change was also observed in expressions which describe relationship between the school region and the country or the world.

Number of environmental elements sung in the school songs is decreasing recently because of two reasons. Firstly, number of the schools itself is decreasing. This tendency is resulting less numbers of the songs can survive. Secondly, newly appearing songs have a tendency not to sing environmental elements by identical place names. The latter tendency is increasing the more vague description of regional environments.